

【平成31年研究発表会発表記録】

紙漉きの里を守る—宮地和紙と周辺景観の保存

磯田節子¹⁾*

1 熊本高等専門学校・八代宮地紙漉きの里を次世代につなぐ研究会
〒866-8501 八代市平山新町2627

I はじめに

宮地和紙は、熊本県でもっとも古い400年以上の歴史があり^{注1)}、加藤・細川藩の御用和紙として、県下随一の技術を誇っていた。紙漉きの里となる八代市妙見町辺田周辺には、紙漉きのために、水無川から引かれた幾筋もの水路が今なお残されていて、美しい景観を呈している(図1)。



図1 紙漉きのために400年前に引かれた水路

1975(昭和50)年頃になると、生業として紙漉きを続けているのは宮田寛氏1人となった(熊本県内でも1人)。同氏が紙漉きを辞めるのを待って、水路の一部を暗渠とする計画が上げられた。そこで、筆者は宮地和紙と水路景観を次世代に残すことを目指して、地元住民、紙漉き関係者、崇城大学および熊本高等専門学校の教員と学生、専門家等の協力を得て、2015(平成27)年4月に研究会を設立した。2018(平成30)年3月、宮田氏のご高齢のため紙漉きを辞めることになったが、地元の小中学校で長年続けられてきた紙漉きによる卒業証書づくりは、矢壁政幸氏に引き継がれている。

II 活動の目的と活動内容

研究会の活動は、主として次の3項目を目的としている。

- (1) 宮地和紙を八代市はもとより広く知っていただくこと。
- (2) 宮地和紙を保存・継承する手立てを考え、

注1) 熊本県の和紙は柳川藩溝口村(現築後市)から伝えられた宮地和紙と、ほぼ同時代に朝鮮高句麗の紙職人道慶等から伝えられた浦田紙等の2つの系統がある。宮地和紙のルーツ、溝口村へ和紙を伝えた日源上人の郷里は越前五箇村であり、越前流の紙漉きと言われる。

*Corresponding author: e-mail:setsu.isoda@gmail.com

実践すること。

- (3) 紙漉きのために引かれた、暮らしの中の水路景観を保全すること

主な活動内容としては、

1. 「宮地和紙に暮らす店」の開店。いろいろな場所で、開店日を限定して展示・販売を行う。
2. 講演会やデザイン発表会の開催
3. 宮地和紙を使った「うちわづくり」などのイベントの開催。宮嶋財団との共催で、岸部孝子先生を講師として、子供たちを対象としたイベントも行っている。
4. 崇城大学芸術学部デザイン学科原田和典教授の研究室と連携した、新たなデザイン開発や商品化。
5. 妙見祭で用いられる「白和幣」に、矢壁氏製作の宮地和紙を提供すること。2018（平成30）年より実現している。
6. 紙漉きの里をゆっくりと歩く、「紙と水辺の暮らしを歩く」の開催。終了後には、「ミニ和綴じ本づくり」や「紙漉き体験」も行っている。これらの活動目的を達成するには困難な課題もあるが、継続が大事であると考えている。



図2 うちわプロジェクト参加者の作品

III 主な活動の紹介

(1) うちわプロジェクト—来民渋うちわ

栗川商店と宮地和紙のコラボレーション

このプロジェクトは、こだわり雑貨店「KoKIN」（八代市）を経営する寺本美香氏による発案で始まった。栗川商店は、山鹿市来民にある400年の歴史を誇る「うちわづくりの老舗」である。このプロジェクトは、寺本氏と筆者が栗川商店の協力を得て実現したものである。これまでに、第1回イベントを2018（平成30）年7月、第2回を2019（令和元）年8月に開催した。これらのイベントでは、うちわ職人の下河広介氏等の指導の下で宮地和紙を使ったうちわを作る。人気が高く、35名程度の定員は満員となっている（図2）。

(2) 「宮地和紙に暮らす店」の開店

宮地和紙と崇城大学学生のデザイン作品の販売

「宮地和紙に暮らす店」を開店日限定で開店し、特に11月の妙見祭当日と前日の御夜には、毎年開店している（図3）。2018（H30）年には、JR八代駅前の珈琲店ミックや日奈久温泉金波楼で、展示期間中に開店した。この店では、宮田氏と矢壁氏が漉いた和紙や、その和紙を使って崇城大学



図3 妙見祭当日の「宮地和紙で暮らす店」崇城大学原田和典教授と学生（宮地小学校グラウンド）



図4 宮田寛氏製作 障子紙

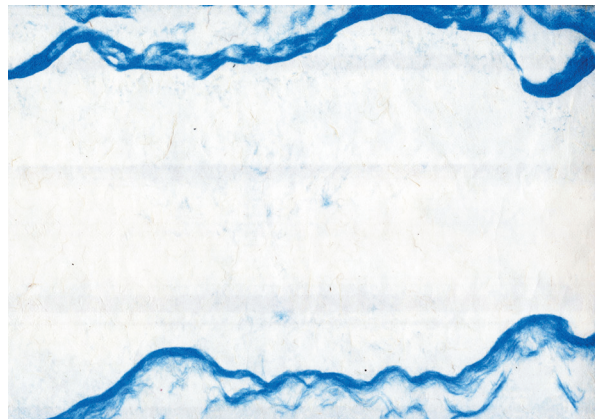


図5 矢壁政幸氏製作 打雲紙



図6 崇城大学学生の作品 (a) エンボス加工のポチ袋, (b) ガメカード, (c) ヘアゴム



の学生がデザインした作品を販売する。

宮田氏は主に障子和紙(図4) やちり紙と呼ばれる極薄の和紙を漉いていたが、ちり紙は宮地和紙の特徴の1つとされている。一方、矢壁氏は打雲紙(うちぐもがみ) や水玉紙(みずたまがみ)等、手の込んだ和紙を漉いている(図5)。打雲紙は、11世紀にはすでに漉かれていて、色紙・短冊・懐紙等に使われた。水玉紙は、江戸時代中期から主に越前で漉かれていたとあり、主に和歌料紙として使われていた^{注2)}。当店では、崇城大学芸術学部デザイン学科原田研究室の学生に、宮

地和紙を用いたデザインを依頼している。和紙の特徴を活かしたエンボス加工のポチ袋、和紙の繊維を活かしたポストカード、ヘアゴム、カラフルなマグネット等(図6)、人気商品となっている。

(3) 「紙と水辺の暮らしを歩く」

かつて盛んだった頃の紙漉きの痕跡を歩く、「紙と水辺の暮らしを歩く」を毎年開催している(図

注2) 久米康生 2012. 和紙文化研究事典, 法政大学出版部, pp. 84, pp. 348.



図7 コースのポイントで参加者に説明する
森山学教授（熊本高専）



図9 住宅地の中を流れる水路



図8 水路で漂白した楮（こうぞ）を洗う宮田寛氏



図10 妙見町辺田周辺の「宮地紙漉きの里マップ」

7). 紙漉きの痕跡は、なんとといっても、紙漉きのために400年前に引かれた水路である。現在でも、水無川から分岐して幾筋もの水路を確認できる。宮田氏も、その1つの水路を使って紙を漉いていた(図8)。紙漉きの工房を「職屋」と呼ぶが、すぐ近くに水路があることが紙漉きの必須条件となっている。これらの水路は幅1.2m前後で、深さも浅いため、かつては米や茶碗等も洗われていた(図9)。現在も以前ほどではないものの、清らかな水が流れている。住宅地の中を流れる水路沿いには白菜が干されたり、秋には川カニの仕掛けが置かれたりしている。このような暮らしの景色も楽しみながら歩くことができる(図10)。

IV 終わりに

長い間、生業として紙漉きをしていた宮田氏が、ご高齢のため辞められたのは残念であるが、幸いなことに、矢壁氏に引き継がれている。矢壁家の先祖は、この地に紙漉きを伝えた新左衛門一族と言われている。八代宮地紙漉きの里を次世代につなぐ研究会では、以上述べた活動を通して、熊本県で屈指の技術力を誇った宮地和紙を、次世代へつなげていきたいと考えている。福岡県八女市には、八女伝統工芸館のような和紙の展示販売ができる施設がある。八代の宮地にも建設できないだろうか、動いてみようと思う。